展勝地風土記 Vol.7
平成26年1月24日
展勝地開園100周年記念事業準備委員会
問い合わせ／北上市都市整備部都市計画課☎72－8279

展勝地開園100周年記念事業準備委員会で、100周年に向けた取り組みとして、より多くの市民に展勝地を知っていただくため、展勝地に関するさまざまな情報を紹介しています。歴史的なこと、地理的なこと、自然環境のこと、そして、展勝地に深く関わった人々や展勝地を題材にした美術・文芸作品などについて紹介していきます。次回は平成26年4月25日に発行します。

信仰の道　あずま海道

元北上市立埋蔵文化財センター所長　沼山　源喜治

古代寺院の道

北上川東岸の丘陵地帯を南北に延びる古道がある。江戸時代中頃の伊達藩の地誌(安永風土記)には、「あずま海道と言い伝えている古道がある」とある。北上川の東沿いを平泉から紫波方面に向かう道だ。「東海道」とも書かれている。

この名は、古代から北上川西の方を通っていた北上盆地の幹線道路(奥大道)に対し、北上川の東を通る道という意味だ。同じ名で呼ばれる古道は宮城県や福島県にもある。

江戸時代にすでに「古道」と言われていたのだから、かなり昔からの道ではないか。歴史に関心を寄せる道沿いの人達が、幻の道を追って熱心に探索を続けている。

北上市部分のおおよそは、南から稲瀬地区は内門岡、立花地区は低地に下った宿館付近、黒岩地区は白山神社付近、更木地区は八天・大竹などを結ぶ。北上川に面した丘陵地の西端を上り下りする山道である。

立花地区と稲瀬地区を通るこの道は、江戸時代には「寺坂」の峠を越えて藩境を往来する道として重きをなした。峠の南は伊達、北は南部。両側には関所があった。道沿いには一里塚も。

さて、このあずま海道の、奥州市・北上市部分のルートに沿って、古代の寺跡や仏像がいくつも残っている。

南の黒石寺(奥州市)から北の成島毘沙門堂(花巻市)にかけての間。高台寺・高勝寺・国見山廃寺・横町廃寺・白山廃寺・大竹廃寺などを加えて10カ寺はくだらない。時代は安倍氏・平泉藤原氏時代を含む、9世紀から12世紀にかけてのもの。時期により、途絶えたり、新しく開かれた寺も混じるが、道沿いに点々と建て連ねられているかのようである。

これらの寺をたどる道が、少なくともこの地域でのあずま海道だったと私は考えている。それは、北上盆地の人々が救いを求めた信仰の道であり、あるいは道行く人々の安全と祈りに応ずる道寺でもあったかもしれない。

立花村の横町廃寺

このような寺の一つに、近年見つかった横町廃寺がある。所は昔の立花村。発掘された当時は大いに話題を呼んだ。今は東陵中学校の正門脇で、保護のために土で覆われひっそりと眠っている。どんな寺か。忘れられないように話しておこう。

この寺跡は平成5年、東陵中学校を建てる時の発掘で見つかった。仏堂の大きさは平面が12メートル×9メートル。大きくがっしりした土台石が整然と並んでいた。地方では、まれな堂々たる仏堂跡である。位置は国見山廃寺と白山廃寺のほぼ中間。昔の立花村と黒岩村の村境にほど近い。時代は11世紀後半、安倍氏の全盛期だ。

意外なことに、この発見には次のようなおまけが付いた。江戸時代に南部藩の地方役人が調べてまとめた「二郡見聞私記」という冊子がある。これに、「立花毘沙門堂の二つの仁王像は村境の大道わきの壊れたお堂から移したものだと、村の人達が言い伝えている」と書かれているのである。つまり、現在、立花毘沙門堂に祭られ国指定文化財になっている持国天像と増長天像は、発掘された横町廃寺に、かつて祭られていたものだ、というのである。確かに、

横町廃寺跡と立花保育園(市教育委員会提供)

※沼山源喜治　1941年(昭和16)二子町に生まれる。慶応大学史学科卒。北上市立埋蔵文化財センター所長、岩手考古学会会長を経て、現在、岩手考古学会顧問・北上市文化財保護審議会会長・北上市立中央図書館近世近代文書調査員。

今、立花毘沙門堂に祭られている、その二つの像と、もう一つの毘沙門天像とは、時代も作風も異なり、出自が違うことは明白だ。

また、この廃寺跡が見つかった場所は、まさに伝えの通り、村境の「大道」のかたわらなのだ。この道跡は、今でも立花保育園裏の高台上の縁をかすめて痕跡をとどめている。近くには江戸時代の一里塚も一つ残っていた。だが、東陵中学校の土地造成で埋められてしまった。

村人の言い伝えが、本当かどうか、また寺の名前も分からない。ただ、立花毘沙門堂の「二つの仁王像」は、横町廃寺跡の堂々たる仏堂にふさわしく、都風の優れた仏像であることは確かである。

この廃寺は信仰の道の寺の一端を語りかけてくれる。そして「あの仁王像はうちのものだ」という声も聞こえてならない。

安倍氏と国見山廃寺

北上川東岸丘陵に古代の寺が次々と建てられていった歴史の背景はどうか。9世紀初め、北上盆地に胆沢城が築かれ、仏教が伝わった。国は国見山廃寺などを拠点に、仏教の力を借りて支配を安定させようとした。平野部は人々の生業の場であり、支配の場となった。これに対し北上川東岸丘陵地帯は寺々が建つ仏教の聖地となった。

やがて政治が乱れた11世紀。北上盆地では豪族安倍氏が国に代わり事実上の支配者となる。安倍氏は厚く仏教を信仰し、仏教を盛んにすることに力を注いだ。一族には出家したり、高僧として名を成す者も出た。山合いの村々にも小さいながら新しい寺が建てられ、仏像もたくさん造られた。盛岡大学教授の大矢邦宣氏によると、この時期に造られた仏像の数は、今日に残っているだけでも50数体にも及ぶという。

そうした施策の原動力になったのが国見山廃寺である。以前からの諸仏堂は大規模に改造、増築され、寺容が一新された。国見山廃寺は、あらためて北上盆地の中核寺院としての役割を負い、周囲の寺々との関係をいっそう強めていった。

さて、北上盆地の古代の寺はどうして北上川東岸丘陵に多いのか。

北上川から西の地域でも、近年、古代の村の寺とも言える小さな寺跡が2、3見つかってはいる。だが、数も大きさも取り立てて言うほどではない。どう見ても北上川東岸丘陵が圧倒的だ。

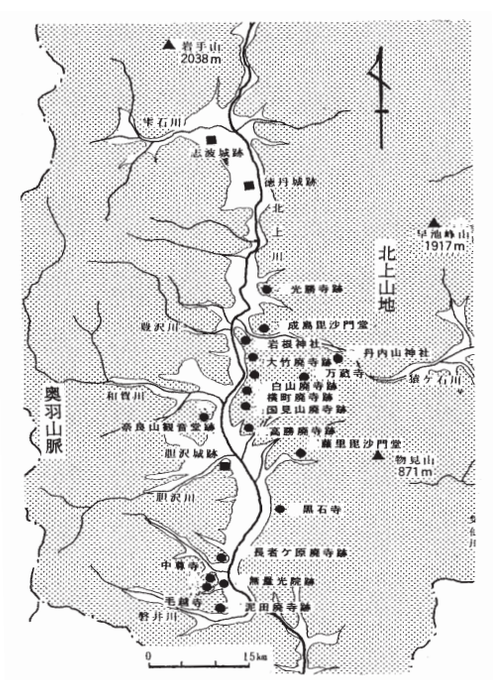
どうしてか。私はこう考えている。寺は山に建てるという当時の流行と、寺の活動の在り方によるのだと。

奈良時代は人が多く住む平地に寺が建てられた。だが平安時代になると僧の厳しい修行と勤めの場を山に求め、山に寺を建てることが多くなった。北上川東岸丘陵は太古の稲瀬火山が噴火した岩山だという特徴がある。北は花巻市の胡四王山、南は奥州市黒石寺にかけてだ。露頭の多い山丘は、世俗を隔つ清浄地として、かっこうの環境だったのである。

また、山に寺を建てるといっても里から遠く離れた奥山に建てるのではない。寺は里の人々との密接な信仰関係を保つ必要がある。このため、集落密度が高い地域に近い里山に寺が建てられることが多かったのである。里との信仰関係とは参詣や寄進などのこと。集落密度が高い地域とは江刺・胆沢・和賀だと言えるだろう。

東北古代史の権威だった高橋富雄氏は言った。東北で古代の仏像が集中してたくさん残っている所は、会津盆地と北上盆地だと。その北上盆地の仏像のほとんどは北上川東岸丘陵のものを指す。

こうした事実には、安倍氏の仏教政策と、それを支えた国見山廃寺が大きく関わっていたことを知らねばならない。それによって培われた豊かな土壌があってこそ、次の時代の平泉に大輪の花が咲いたのである。



北上盆地の主な古代寺院配置(沼山作図)

高橋盛吉元市長は著書で、北上川の西岸から見る展勝地丘陵の風景は、ドイツの古い町ハイデルベルクの「哲学の道」の丘に似ていると言っている。ネッカー川をはさんだそれより、こっちのほうがはるかに雄大だと。

そうか。なら、こちらは「祈りの道」・「思惟の道」だ。寺坂の古道をたどり、国見山中や里を縫う歴史の小道を逍遥する。春光のもと、木陰のなか、秋彩を分け、落ち葉を踏む道だ。それがためにも、消えそうになった山中の遊歩道をぜひ整備したいものだ。